

川崎病に対するプレドニゾン・アスピリン併用療法の有効性について 5年間の検討

野中善治, 前川喜平, 久保政勝, 簡 瑞祥,
小川 潔

要約: 255例の川崎病症例に対しプレドニゾン・アスピリン併用療法(以下PACT)を5年間にわたって行ないその成績を60例のアスピリン治療群と比較検討した。発症3ヶ月での冠動脈後遺症の合併率は6.3%, 12ヶ月では3.5%であり, このうち中等度以上の冠動脈瘤を残した症例は3例1.2%であった。急性期の臨床所見や検査所見では軽度経過炎症所見の正常化までの期間も短かった。川崎病に対するPACTは冠動脈後遺症の発生率から見て従来の治療法に比べ好ましいと考えられた。

見出し語: 川崎病, 冠動脈合併症, 冠動脈瘤, ステロイド療法, アスピリン療法

<はじめに>川崎病に対する治療法として従来, アスピリンを主体としたものが行われてきた。最近ガンマグロブリンの大量療法の有効性が国内のみならず米国でも検討されている。我々は本症に対しPACTを施行してきたが, 冠動脈病変の発生率および急性期の臨床経過の両面からみて優れた成績を得たので報告する。

<対象と方法>対象は昭和56年7月から61年6月までの5年間に, 埼玉県立小児医療センター循環器科と東京慈恵会医科大学小児科に入院し第9病日以内に治療を開始した255例である。初期の3年間東京慈恵会医科大学の1分院でコントロールスタディとして60例にアスピリン治療を施行し

た。対象には症状の重症度などによる選別は行わなかった。各母集団の患者背景に差異は認めない。治療は心エコー図上明らかな冠動脈病変のないことを確認し, プレドニゾン2mg/kg, ジビリダモール5mg/kgの投与を開始した。CRPが陰性化し, 赤沈値が29mm/60分以下になった時点でプレドニゾンは漸減中止し, アスピリンは30mg/kgに減量, ジビリダモールは同量でこの時点から1カ月間投与を継続後, 冠動脈病変のない症例では中止した。心エコー図は週2回以上施行し, 発症後3カ月の時点で, できるだけ全例に冠動脈造影を施行した。特に埼玉県立小児医療センター循環器科では58年4月からの3年2

東京慈恵会医科大学小児科学教室

Department of Pediatrics, The Tokyo Jikei University School of Medicine

カ月間の104例中99例に冠動脈造影を施行した。

<成績> a. 急性期の経過：両群（以下A群，P群）について検討した。有熱期間の平均はP群6.1日，A群で10.2日。CRP陰性化までの平均日数はP群13.1日，A群19.6日。赤沈値（1時間値）の平均最高値はP群で76mm，A群で92mmであった。

b. 冠動脈病変の合併：合併率を急性期，発症後3カ月，発症後1年の3時点で評価した。急性期の冠動脈病変は，P群17.6%，A群で28.3%。発症後3カ月ではP群6.3%，A群16.7%。発症後1年ではP群3.5%，A群8.3%であった。

c. P群の冠動脈病変の経過：発症後3カ月の時点で冠動脈病変を残した16例の推移をみた。冠動脈病変の程度を冠動脈瘤の直径と大動脈径の比率で表現し3群に分けた。16例の内容は大きな冠動脈瘤（大動脈径の2分の1以上）が3例，中等度の冠動脈瘤（同径の2分の2から3分の1）が6例，小さな冠動脈瘤（同径の3分の1以下）が7例。発症後1年では16例中7例は造影所見上，正常化。6例が小さな冠動脈瘤，大きな冠動脈瘤は2例となっていた。以上より発症後1年の時点で中等度以上の冠動脈瘤はP群の1.2%のみであった。

<考案>川崎病に対する治療法は冠動脈合併症を防ぐ観点から種々の試みがなされているがいまだに病因病態が不明な疾患だけに決定的なものはない。従来のアスピリン療法による治療成績にはある程度の評価はあるものの，報告による差は大きい。厚生省の班研究によれば冠動脈病変合併率は1年で1%であったという。しかしながら多くの

小児科医の経験的な数値とは多少のずれがあるようである。最近の厚生省班研究報告によればガンマグロブリン療法が38.6%の症例で使用されているという。しかしながらその評価は必ずしも一定していない。

初期のステロイド治療では臨床所見上，重症な症例が多く，病初期からの例は少なく，治療前の冠動脈病変の評価も不十分である。血栓を伴う例が多いと言われる理由もここにあるように思われる。^{8) 9)}

ステロイドを病初期から用いた大きな母集団による検討は報告されていない。我々はステロイドの持つ強力な抗炎症作用に着目し，PACTの有効性について報告してきた。^{10) ~ 13)} 症例数の増加に伴い多少の変動はあるが，おおむね良好な成績であり，急性期の血管炎症の程度が軽く，期間も短いという結果を得た。冠動脈病変を完全に防ぎえないものの，現状の治療法の中では評価されうるものと考えている。

文 献

- 1) 草川三治：日児誌 87:2486, 1983
- 2) 草川三治：日児誌 90:1844, 1986
- 3) 厚生省川崎病研究班：小児科 28:1059, 1987
- 4) 藤原 徹・他：小児科臨床 38:77, 1985
- 5) 曾根克彦・他：小児科臨床 41:2452, 1988
- 6) 尾内善四郎・他：日児誌 92:2367, 1988
- 7) 簡 瑞祥・他：小児科臨床 42:1477, 1987
- 8) 田崎 孝・他：小児科 18:1053, 1977
- 9) 浅井利夫：小児科臨床 34:477, 1981
- 10) 簡 瑞祥・他：日児誌 87:2010, 1983
- 11) 簡 瑞祥・他：小児科診療 47:968, 1984
- 12) 簡 瑞祥・他：日児誌 89:968, 1985
- 13) 簡 瑞祥・他：日児誌 91:968, 1987



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:255 例の川崎病症例に対しプレドニゾロン・アスピリン併用療法(以下 PACT)を 5 年間にわたって行ないその成績を 60 例のアスピリン治療群と比較検討した。発症 3 ケ月での冠動脈後遺症の合併率は 6.3%,12 ケ月では 3.5%であり,このうち中等度以上の冠動脈瘤を残した症例は 3 例 1.2%であった。急性期の臨床所見や検査所見では軽度に経過し炎症所見の正常化までの期間も短かった。川崎病に対する PACT は冠動脈後遺症の発生率から見て従来の治療法に比べ好ましいと考えられた。